

思惑と偶然

クレオパトラの鼻の格好がどうであったかということは、本来大した問題であるはずがない。ところが、彼女の鼻の先が曲っていたことが、当時の世界史の方向を変える機縁になったといわれている。

ユーモアというものは、微妙なタッチをもつ人生の塩ともいべきものである。ある軽妙なユーモアのためにその場面の雰囲気が一変して、難航していた懸案がケロリと片づくことがある。チェンバレンがある日登院してみると、自分の前を鷺鳥のような恰好で歩いていくチャーチルを見かけた。彼は早速、その真似をしながらおどるように歩いてみた。ところが彼の物真似をその後ろでみていたマックケネイルは、腹をかかえて笑っていた。その一事で、チェンバレンとマックケネイルの二人の間に永年わだかまっていた、動きのとれない氷の海のような不和が解けたという話がある。

これらはみんな、たあいもない些事であるが、それが案外に重大な契機になることがあることを物語っている。政界の出来ことも、いわゆる評論家が書いた青写真のように必ず

しも運ぶものではないし、策謀家の思惑のように動くものでもない。そのときの機縁というものが、すべての人の思惑、いな当事者の目論見とは別に、事がらの帰結を招来する契機になることが少なくない。昭和三十四年六月に行われた岸内閣の改造にも、このような消息がよみとれるように思われる。私はここで、自分がたまたま居あわせた池田さんの入閣にいたる経緯の「こまを思い出す」。

六月十六日の夜のことであった。例によって「火曜会」（池田さんと松永安左工門老を囲む会）の六月例会が開かれていた。少し遅れて池田さんと私も出席した。出席してみると、いつもの座敷で日銀の山際さんと、開銀の太田さんがつくねんと坐っているだけであった。他の面々は隣の部屋で、難航した内閣改造をめぐってカンカンガクガクの論議を交している最中であった。そして私にまず、その別室に来てくれということであった。入ってみると、皆の視線が私に注がれ、いつになく真剣な面持ちの松永老が、半ば紅潮した興奮を交えてこういわれるのである。

「もしこの改造で岸君が失敗したら、政局はあらぬ方向へ走ってしまっておそれがある。岸君のやり口をあげつらい、岸君をやり玉にあげることもいいが、日本の国民や保守党を

どうしようとするのか。やれ筋がどうのこうの、イキサツがどうのこうのと、君たちのや
っていることはなっておらん。こういう局面にきたら、イキサツや筋に拘泥すべきではな
い。勇気をもって政局の收拾に乗り出さなければ、池田君も政治家の風上におけないでは
ないか。君がそばについていて、いったい何をしているんだ」

慈父のようにやさしいいつもの老人とうって変って、松永老は激越な口調で畳みこんで
きた。私はまるで被告扱いであった。そこで、私はいった。

「こんどの改造は私どもが進言したのではなく、岸総理が、総理としての発意と責任
においてやっておられることです。池田に対する入閣懇請も、こちらから申入れたものでは
なく、総理の希望であり懇請です。だからまず断っておきますが、池田は全く受身で
あって、進むも退くも全く自由な立場にいるということです。いまのお言葉は、私として
簡単に聞き流すことができないものがあります。総理の発意と責任において手を染められ
た改造が、いろいろの曲折をへて行き詰り、仰せのように政局が大きい不安に陥ってしま
った。この政局不安を解消するのは、池田をはじめわれわれの責任であって、そうしない
のは勇気がないばかりか、政治家でもないという言い方をされるのは、岸さんに対して責

方がたは点数が甘く、池田に対しては辛すぎはしないでしようか。なるほど仰せの通り、岸さんも過誤なきを保し難い人でしょうが、池田だって黙って人の不始末の尻ぬぐいをするほど偉い男ではありませんよ」

私もムカムカしていたものだから、ついこの人たちに食ってかかってしまったのだが、松永老は「少々言葉が過ぎたかね」と、多少柔らかい面持ちになられた。その後池田さんも入ってきて、その人たちからしきりと政局收拾のための入閣を勧告されたが、池田さんは極めて不機嫌な面持ちで頑固に入閣を拒み続けていた。そこで今夜はみんなで、もっと考えようということとその会はお開きになった。

私はこの改造問題がおこつて以来、毎夜寝不足がつづいていたが、その夜は朝方までまんじりともできなかった。私は乏しい頭で、政局の前途にあるいくつかの可能性をあれやこれやと分析して、その得失を考えていた。池田、河野（一郎）両氏の入閣しない小粒内閣、河野、大野（伴睦）両氏の巻返しによる河野、大野寄りの内閣、岸さんの投出しのケース等々、いろいろの場合を自分なりに分析してみた。そして私はそのいずれもがこの際とるべき方策でないという考えに傾きかけていた。

そこで翌朝未明、私は床の中にいた池田氏に電話をかけて、「どうも今日という日は、えらい日になりそうな気がしてなりません。岸さんの従来からのやり口をあげつらったり、昨年の十二月末に岸内閣に離縁状をたたきつけた経緯にこだわっているのも、昨日まではやむを得なかつたと思いますが、今日われわれが直面する段階は、昨日と次元を異にした局面になりそうです。今日は大勢の人から貴方の進退について、いろいろな進言や献策があると思います。貴方は反主流の頭目という立場ではなく、日本の政界における領袖としての立場に立って、素直にその意見をお聞き願いたい。そして、みずからの意見（入閣を拒むこと）はなるべく述べられずに、考えておくということにして下さい」と希望し、池田さんも「うん」と応えられた。

その日は私の予感したように、政局は最悪の局面を迎えた。午前の寄りつきから、株式市場には投売りが殺到して、ダウは三十円方の暴落をみた。岸総理側近筋から、「岸さんが退陣の意向をもらされた」というような情報が伝えられた。午後二時半になって、岸さんと河野さんとの間の系が断られた。岸内閣は最悪の事態に直面し、政局不安は刻一刻と深刻の度を加えてきた。私が池田さんを訪ねたのは、午後三時ちょっと前であった。私は書

齋で今朝からの経過、すなわち吉田元総理の意見や、岸総理、佐藤蔵相その他要人からの懇請、言論界のベテランの進言その他を聞かされた。それら一切を頭の中で反芻、整理してみたのち、私は思い切つて申し上げた。

「人の世のめぐり合わせというものは、われわれの知恵や分別を越えたものがあります。今までわれわれがとってきた立場は、それなりに間違つていたとは思いません。しかし今日、政局に直面し、みずから求めたものでもないのに、貴方は文字通り内閣改造の中心人物になってしまいました。岸さんは貴方にとつて、民主党結成と鳩山内閣の誕生、吉田内閣の退陣という一連の経緯からみて、終始政敵だった。それなのに、その岸さんの立場を救い、政局の混迷を打開するカギは今や貴方が持つておられます。しかしいつも貴方は、われわれは政治家として、政界というコップの中で物を見てはいけない、国民の前で舞いを舞うべきだといつておられます。このことを今、私は思い出しています。この段階にきては唯一つ、現前の混迷した政局を軌道に乗せ、国民に安心してもらうのが貴方のとるべき態度ではないでしょうか。進むのが是か、退くのが是か、正直にいつて私にもわかりません。進むとなれば、貴方に対し反主流の諸君は冷淡になりましょうし、主流の諸君から

は警戒されることになり、自派の諸君も必ずしも釈然としないことでしょう。いわば貴方はいちおう孤立することになりました。退くとなった場合、貴方はまた国民一般から、頑固一徹でわがままに振る舞い、政治の全局を收拾する弾力的な配慮がないというそりを免れないでしょう。進退窮まるとはこのことでしょうか、道は一つしかありません。二つの道はないはずで、しかもいま、その決断を貴方は求められています。私は貴方に勇断を求めます。困難ないばらの道ではあるが、政局收拾のため去就をきめて下さい。毀誉褒貶は論者と史家に譲り、政界の領袖としての自覚と責任において総理と隔意のない懇談を遂げ、総理の真意をよくたたかかれた上で入閣に踏み切って下さい」

田中角栄君が飛びこんできて、機関銃のような速射法で入閣を説き、嫌がる池田夫人にモーニングの用意を勧めたのもこのときであった。

その後の経過は世間周知の通りである。かくて池田さんは半ば国民の期待に沿って、半ば国民の冷評のうちに入閣した。進むのが是であったか、退くのが是であったか、いまなお私には判定しがたい。私はあのと池田さんのおかれたギリギリの限界状況にあって、ああするより他に道がなかったのだと自分にいい聞かせている。

吉田さんが六年にわたる永い政権の座を去ったのは、昭和二十九年十二月七日であった。それから四年半、日本の政界は旧民主系、換言すれば反吉田的勢力の支配下にあつたのである。したがつて吉田さんの直系池田さんには、いわば不遇の時代がつづいて、日ソ交渉や保守合同、その他政界の重大事件には終始反主流の立場で苦悶してきた。ところが今度の改造の結果、内閣のキャップこそは変わらないが、これを支える柱は池田さんと佐藤さんになつたといえる。その池田、佐藤両氏は、まぎれもなく吉田さんの高弟で旧自由党系の実力者である。このような結果は、もちろん私どもの仕組んだ芝居ではない。また当の池田さんや佐藤さんが目論んだ構図でもない。ただ六月のあの時期における事の偶然の成行きが、すべての人の思惑を越えてもたらした結果である。政界の出来ことは、こうした偶然の成行きによることが少なくないといえよう。

(昭和三四・八・一)